

1 単元名

「竹下商店街プロジェクト」

2 単元の目標

- 竹下商店街理事長の話の聞いたり、祭りに参加したりする活動を通して、町を盛り上げるためのプロジェクトにたくさんの人々が動いていることを改めて知り、現状と課題を理解している。

(知識・技能)

- 竹下商店街に関わる人々の工夫や努力について考え、さらに自分たちにできる取り組みは何かを考え、適切に表現している。

(思考・判断・表現)

- わが町の商店街の様子に関心をもち、これからも住み続けられるために何ができるのかを意欲的に考えようとしている。

(主体的に学習に取り組む態度)

3 評価規準

ア 知識・理解	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に 学習に取り組む態度
① 竹下商店街理事長の話の聞き、町の歴史を理解している。 ② 祭りに参加する活動を通して、盛り上げるためにたくさんの人々が動いていることを改めて知り、現状と課題を理解している。	① 竹下商店街のプロジェクトに関わる人々の工夫や努力について考えている。 ② 自分たちにできる取り組みは何かを考えている。	① わが町の商店街の様子に関心をもち、これからも住み続けられるために何ができるのかを意欲的に考えようとしている。 ② 少子高齢化の問題に関心をもち、自分なりの考えをもっている。

4 単元について

(教材観)

本単元では、総合的な学習の時間「竹下商店街プロジェクト」で地域とつながって学習を進めていく。また、近隣には大型ショッピングモールもあるため、人の流れは商店街よりもショッピングモールに流れている傾向もある。また、商店街で働く方々の高齢化及び商店街に人が集まらないという課題もある。そのような課題に直面した児童が今後のことについて考え、行動していこうとするための学習である。

子どもたちにとって商店街は慣れ親しんでいる場所であり、どのような背景で続いているのかは知らない。また昔に比べると商店街のお店は減り、人も集まらずどんどん衰退している現状もある。しかし、商店街の方々の陰での努力が実り、今もなお続いているという事実を児童は知らない。

そこで、竹下商店街の理事長にゲストティーチャーとしてお招きし、私たちの住んでいる町がどのように変化していったのかを知る。戦後の写真を見て、今とはまったく様子が違うこと、身近な病院が昔からあったことに対して児童は驚きを隠せないと予想される。

そのような商店街がどんどん衰退しているという現実を知ること、わが町の商店街がいつか消えてしまうかもしれないという課題に直面し、児童にとっては切実な問題となっていくと考えられる意味では、この教材は価値あるものである。

(児童観)

児童が住んでいる竹下の町は、博多駅から電車で一駅の立地で非常に便利な場所である。そのため、ベッドタウンとして転出入が非常に多い地域である。児童の両親や祖父母がもともと竹下の町に住んでいる家庭もいる。本学級の児童は、33名中の2名がもともと竹下在住であり、9名が幼稚園の頃から住んでいる。それ以外は小学校の時に転入をしてきている。以上のことから、竹下の歴史や昔と今を比較しても理解が薄いことがわかる。

しかし、素直で心優しい児童が多いため、どんどん衰退していく商店街の課題に対して直面させることで、力になりたい、どうにかしたいと思う児童が多いと考える。

(指導観)

本単元では、竹下商店街理事長の田崎さんをゲストティーチャーとしてお招きし、住んでいる町の歴史を知る。昔と現在の写真を比較することで、町の移り変わりの様子だけでなく、沢山の人が関わってきたことで今の町があることに気づかせる。

次に、年に2回行われる商店街主催の祭り（1回目：竹下まつり 5月 2回目：ふれあい市 11月）に参加させる。祝日に行われる祭りのため、全員参加はできない。しかし、保護者と参加することを通してどのような人が動いているのか。どのようなお店が出ているのか。商店街の祭りを盛り上げるためにどのような工夫をしているのかを調べる活動を取り入れる。

1回目の祭りに当日参加した児童は、呼び込みがたくさんいたことや焼き鳥やジュース、博多のお土産「めんべいのせんべい」や「福太郎の明太子」のお店が出ていたことに気づくと考えられる。提灯やチラシ、ステージも用意されており、商店街の人だけでなく、新しく来た人も楽しめるような工夫がされていることに気づいていく。

そして、竹下商店街理事長を招いて2回目の祭りである「ふれあい市」の説明をしてもらう。ここでは、年々参加者が減っていることや、運営する側の年齢が上がったことによる今までのような活発な活動ができにくい状況であることの話をしてもらう。ふれあい市の祭りを盛り上げるためには「あなたたち（児童）の力をぜひかしてほしい」との趣旨の話をしてもらう。理事長の話聞き、自分たちに何かできることはないかを考えるきっかけと自分の町の商店街について未来のことを考えるようになる。

そのうえで、各学級できることはないかを考え、学年で意見をまとめ、5つの係に分かれる。

- ① 景品づくり係、②しおり・飾り係、③宣伝係、④歴史伝え係、⑤もりあげ係と児童が考えて作る係に一人一つ所属してもらい作業にとりかかる。

そして、竹下商店街理事長をお呼びし、贈呈式を行う。児童が入念に準備を行って作った物を実際に商店街の理事に渡し、自分たちの取り組みが形になっていることを実感させる。

2回目の「ふれあい市」祭りで、児童たちの作ったものが祭りを盛り上げるために活躍していることを知り、自分たちの取り組みで商店街の祭りが盛り上がったという感情や自己有用感が、住み続けられるまちづくりの原動力となっていく。

5 ESD との関連

(主に関連する ESD の価値観)

商店街とは地域と人とを結びつける大切なコミュニティである。そのような商店街が地域にとって大きな意味を成していることを知り、世代間を越えて守っていこうとする価値観を育てたい。また、商店街だけではなく、竹下全体の町作りの価値に目を向け、それらがどのように変遷していくのか、私たちにできることは何かについて考える未来的思考の価値観も育てたい。

(主に関連する SDG s)

竹下商店街プロジェクトの教材として、地域興しの重要性に気づかせ、行動していく本実践は、持続可能な社会の担い手づくりの目標 11「住み続けられるまちづくりを」に関連する実践になる。また、自分たちの町

にある長年続いた商店街を継続していくことのためにできることを考える実践である。

6 学習活動の概要 全21時間

主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考	ESDの視点	ESDの 資質能力
1. 竹下商店街の歴史を知ろう。 GT ②	・竹下商店街理事長をGTとして招き、自分たちの住んでいる町の歴史について学ぶ。	ア①	公平性	クリティカルシンキング
2. 竹下まつりに参加し、町の祭りを盛り上げるのにどのような取り組みがなされていたのかを確かめよう。	・祭りの様子の写真を撮り、取り組みや工夫に気づかせる。	ア② イ①	多様性	コミュニケーション力
3. 商店街ハッピーを着て、運動会でソーラン節を踊ろう。 ①	・竹下商店街を盛り上げるアピールの一つとして、商店街のハッピーを着て踊る。		相互性	
4. 竹下ふれあい市の現状について知ろう。 GT ②	・竹下商店街理事長をGTとして招き、ふれあい市のことを聞く。		公平性	クリティカルシンキング
5. 商店街を盛り上げるために、自分たちにできることは何かを考え、話し合おう。 ⑥	① 景品づくり係 ② しおり・飾り係 ③ 宣伝係 ④ 歴史伝え係 ⑤ もりあげ係	イ②	多様性	クリティカルシンキング 長期的思考力 コミュニケーション力
6. 係に分かれて作業をしよう。 ⑥	・盛り上げるために、また来てもらえるように思いを込めて作成する。	ウ①	責任性	協働的問題解決力
7. ふれあい市に向けて作った物の贈呈式を行おう。 GT ①	・理事長に作成物を紹介し、贈呈する。		公平性	コミュニケーション力
8. ふれあい市へ参加しよう。	・準備してきたものをふれあい市にて提供し、盛り上げていく。	イ① イ②	連携性	協働的問題解決力
9. まとめる ③	・今回の取り組みを学級内で発表する。	ウ②	有限性 循環性	長期的思考力

7 指導の実際と考察

〈 導入 第1, 2時 〉

- 竹下商店街理事長をGTとして招き、自分たちの住んでいる町の歴史について学んだ。子どもたちにとって自分の町について改めて学ぶ機会となり、自分の町について考えるきっかけとなった。



〈 第4時 〉

- 竹下商店街理事長をGTとして招き、竹下ふれあい市の現状について話を聞いた。昔に比べると商店街のにぎわいが少なくなっており、今回の竹下ふれあい市を通して、少しでも多くの人に参加してもらいたいという理事長の思いを子どもたちは真剣に受け取っていた。「一緒に盛り上げてほしい」という理事長の思いを聞いた子どもたちは竹下の商店街のために「自分たちにできることはないだろうか」という気持ちを持ち、自分事としてとらえるきっかけとなっていた。



〈 第14時・ふれあい市 〉

- 子どもたちができることとして考えた内容が「景品づくり係」「しおり・飾り係」「宣伝係」「歴史伝え係」「もりあげ係」である。それぞれの係の子どもたちが当日に向けて準備を行った。
- ふれあい市当日は休日のため全員参加にできなかったが、子どもたちがふれあい市の手伝いに参加し、店の受付や歴史の説明など行ってくれた。自分たちの手作りのものが実際に店に並び、参加者の笑顔が笑顔になっている姿を見て、子どもたちも達成感を感じていた。



〈 第21時 まとめ 〉

- 今までの取り組みをポスターなどにまとめ、学級内で交流を行った。今回の授業を通して、子どもたちが一番感じていたことは、「自分」の竹下商店街という意識が芽生えていたことである。自分事としてとらえることができたことで、他人事ではなく、今後も竹下商店街のためにできることはないかと「考え続ける」ことの大切さを子どもたちは実感していたようだった。



8 成果と課題

- 他人事ではなく自分事として竹下商店街のためにできることを考えることができたことは、持続可能な社会の担い手づくりの目標11「住み続けられるまちづくりを」の一助になったと考える。
- 子どもたちの行いたいものを形にしてきたのだが、竹下商店街のやってほしいことに耳を傾けることができなかった。商店街から感謝の気持ちは頂いたものの、一方通行の取り組みになってしまったと感じている。